

鶴山書院報

第10号

公益財団法人
孔子の里

〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原庫舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人
理事長 横尾 俊彦

基本の古典『大学』を知る

（今に伝わる基本の教え）



公益財団法人孔子の里

理事長 横尾

俊彦
(多久市長)

まだまだコロナ禍ですが、季節はスポーツの秋到来です。美しいグリーンが映える人工芝グラウンドが市内西多久町にあり、たくさんの方々に利用されています。その入口階段部のそばの立派な立像をご存知でしょうか。

昭和三十二年三月十二日、地元出身の篤志家・福島喜代太氏の寄贈として建立された像は二宮尊徳翁の若い時代、二宮金次郎少年が薪・芝を背負いながら読書する様子を表しています。

かつては全国津々浦々の小学校にはあったとも言われる金次郎少年の向学心に燃える姿です。向学心・向上心は国の目標でもありました。

二宮金次郎少年が読んでいた本

ところで、この金次郎少年が読んでいた本は何かご存知でしょうか。精巧につくられ

た像なら、書物の文言もページに刻まれています。

この書物とは古典『大学』です。

『大学』は『中庸』『論語』『孟子』と合わせて四書とされ、もともとは『礼記』の一篇であり、曾子によって作られたともいわれます。

孔子をはじめとする儒学の要諦をまとめたものとも言える内容で、帝王学の基本書のひとつです。帝王学というと「ええっ」と思われるかもしれませんが、けっして難解ではありません。少し努力は必要ではあるでしょうけれど。

実はこの『大学』は江戸期の藩校などでは基本書のひとつでもありました。だから、全国の儒学の学徒にその内容を尋ねれば、必ず知っており、読解の意見交流もできたはずで、

では、どんな教えがあるのでしょうか。有名なものでは「修身齊家治國平天下」があります。「身を修め、家を斉（ととの）え、國を治めれば、天下も平らかになる」の教えです。自分自身をよくよく修める努力の重要性を今に伝えていきます。

「日に日に新たに、また日に新たに」の教えもあります。殷の時代の湯王が身近に使用する青銅製の盤に刻ませた自らを戒める言葉で、日々新たな努力を自らに求めることが欠かせないという教えも紹介されています。

「格物致知」などの含蓄の深い理念も教えられています。その意味などはぜひ実際に調べて読んでいただければと思います。

自らを修め、新たな世を拓く教え

いわば物事の基本の見方をしっかりと学び、その上で、様々な実践においてさらに精進する。学びと自己錬磨の尽きせぬ循環をいざないます。そして人間力を高め、世に役立つ人となるのです。

人としての生き方を考察し、正義を守り、不正を囮らず、日々真摯に努める。そして、社会の発展に役立つ生き方に努める。その地道な努力から本当の自己実現や社会貢献も生まれる。

そんな崇高な教えを、かつての先人たちは日常のように学び、知り、実践に努めていたのだと思います。

いま世の中は、変化が激しく、急速であり、なかなか難しさも増えてきている状況です。前例のないコロナ禍や災害、不測の事態に直面もします。でもあわてず、あせらず進みたい。そのような時だからこそ、不動不易の教えをしかと胸に秘め、あらゆる問題や難難辛苦があろうとも、ひるまず、よわらず、尻込みせず、常に、明日の可能性を信じて自己変革にも挑みたい。苦しさの中にも一条の光を信じて。

日々新たな努力こそ、未来を確実に開いてくれるものです。さあ頑張っていきましょう。実りの秋でありますように。

孔子の里 財団設立30周年記念式典



令和3年7月3日、多久市中央公民館大ホールにおいて、孔子の里財団設立30周年記念式典を開催しました。

「孔子の里」は、重要文化財多久聖廟及び周辺の史蹟等の保全やすぐれた自然と調和のとれた環境の醸成、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興を図り、地域の活力ある発展に寄与することを目的に設立し、これまで活動を続けてきました。

記念式典は、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、財団役員（理事、評議員、監事）、佐賀県内在住の財団関係者や表彰者、講座鶴山塾の受講者等約80名で開催し、孔子の里の30年間の歴史と成果を振り返る場となりました。

記念式典では、横尾俊彦理事長が開会あいさつで「多くのみなさんからののお力添えをいただき30周年を迎えることができました。これからも多久聖廟にまつわる歴史や先人の方々が築き上げられた学びの伝統を継承していきます。」と述べ、公益財団法人孔子の里のさらなる充実を呼びかけました。表彰式では、多年にわたって孔子の里の発展振興に寄与された5

名と1団体の功労者表彰、長年多久聖廟釈菜へ多数の献詩をいただいた12名へ感謝状の贈呈を行いました。

記念式典の後には、おうめい嚶鳴協議会（ふるさとの先人を生かしたまちづくり、人づくり、心そだてに取り組んでいる全国15自治体で組織する団体）と共催で「嚶鳴講座in多久」を開催しました。

嚶鳴協議会顧問の吉田公平東洋大学名誉教授を講師に招き、「生きることは学ぶこと〜論語と人づくり〜」と題してご講演いただきました。学び続けることの大切さや知識や技術を共有しながら暮らしていくことの楽しさ、明日に向けてどう生きていくかがいかに重要かなどを、ご自身の経験談を交えながらお話しいただきました。



▲講演された吉田名誉教授

功勞者表彰

【個人】

石川 忠久（東京都）（公益財団法人斯文会名誉副会長）
 多年にわたり全国ふるさと漢詩コンテストの審査委員長を務め当法人の発展振興に尽力された。

尾形 節子（北多久町）（前多久市日中友好協会理事長）
 多年にわたり中国との懸け橋となって当法人の発展振興に尽力された。

西村 隆司（北多久町）（前多久市郷土資料館館長）
 多年にわたり歴史や文化の専門的知識を活かし当法人の発展振興に尽力された。

林口 彰（東多久町）（元公益財団法人孔子の里常務理事）
 多年にわたり孔子の里常務理事として社会教育の専門的知識を活かし当法人の発展振興に尽力された。

三浦 尚司（福岡県）（福岡県漢詩連盟会長）
 多年にわたり多久聖廟釈菜の献詩者の拡充に努め当法人の発展振興に尽力された。

【団体】

公益財団法人斯文会（東京都）
 （史跡湯島聖堂の維持管理人）
 多年にわたり当法人の公益財団として発展振興に尽力された。



感謝状

多年にわたり多久聖廟釈菜に献詩し
 当法人の発展振興に寄与された。

尾形善次郎（多久町）・笠原 英子（岡山県）
 楠野 修（大阪府）・副島 健三（多久町）
 副島 陽子（佐賀市）・谷村 正俊（福岡県）
 野口 康子（福岡県）・平兮 正道（福岡県）
 平兮 宗賢（福岡県）・藤川俊二郎（長崎県）
 福田登志男（長崎県）・細川 嘉徳（福井県）



孔子の里 略年譜

平成元年	1989年	財団法人孔子の里設立準備委員会設置	平成16年	2004年	多久市・曲阜市友好都市締結10周年記念「市民の翼」
平成2年	1990年	財団法人孔子の里設立 多久聖廟大改修竣工			たく市民大学ゆい工房開講
平成3年	1991年	第1回孔子祭開催 現在の東原岸舎完成	平成17年	2005年	ジュニアガイドスクール開講
平成4年	1992年	天皇・皇后両陛下（現 上皇・上皇后両陛下） 多久聖廟を行幸 趙勇氏を音楽講師として採用 秋季釈菜・第2回孔子祭で腰鼓初披露	平成19年	2007年	高円宮妃殿下多久聖廟視察
平成5年	1993年	多久市と中華人民共和国山東省曲阜市が友好都市締結	平成20年	2008年	孔子像修復・遷座式 多久市・曲阜市友好都市締結15周年記念「市民の翼」 多久聖廟創建300年祭記念式典
平成7年	1995年	第1回論語カルタ大会開催 春季釈菜で獅子舞初披露 秋季釈菜・第5回孔子祭で釈菜の舞初披露	平成22年	2010年	四配像改鑄・安置
平成9年	1997年	曲阜市より大理石製孔子像寄贈	平成23年	2011年	財団法人孔子の里設立20周年記念式典
平成10年	1998年	新年名刺交換会を「新年の集い」と改め開催 多久市・曲阜市友好都市締結5周年記念「市民の翼」 第1回全国ふるさと漢詩コンテスト開催	平成25年	2013年	孔子の里公益財団法人移行 多久市・曲阜市友好都市締結20周年記念「市民の翼」
平成11年	1999年	第1回生活体験学習（通学合宿）開催	平成29年	2017年	広報誌「鶴山書院報」発刊 公益財団法人孔子の里賛助会員制度創設 孔子の里講座「鶴山塾」開講 第1回多久百景写真コンテスト開催
平成12年	2000年	多久茂文像完成	平成30年	2018年	多久市・曲阜市友好都市締結25周年記念「市民の翼」
平成13年	2001年	財団法人孔子の里10周年記念式典	令和3年	2021年	孔子の里財団設立30周年記念式典

石井鶴山の「北海観風草」の旅(其の一)

— 浅間山を詠む詩 —

熊本太学 教授 中尾健一郎

石井鶴山(一七四四—一七九〇)は、多久が生んだ漢詩人である。佐賀藩儒として佐賀藩八代藩主・鍋島治茂に仕えた。『石井鶴山先生遺稿』(中尾友香

梨と共編著、孔子の里、二〇二一年)の「石井鶴山、その人と交友」に人となりと生涯を紹介したが、紙幅の都合により、鶴山の旅と漢詩については充分に論じることができなかった。そこでこのたび六回にわたり、標題の「北海観風草」に収められている詩を取り上げ、鶴山の紀行詩について紹介する。

鶴山は天明七年(一七八七)、四十四歳の春、江戸を発ち、帰国の途についた。いつもの東海道もしくは中山道を通る旅程を採用せず、この年は日本海沿いを巡って旅した。江戸の板橋宿(現在の東京都板橋区にあった宿場)から信州追分宿(現在の長野県軽井沢市にあった宿場)まで行き、そこで道を北国街道に転じ、越後(現在の新潟県)に達すると、以後、北陸道を南下し、丹後(現在の京都府)の天の橋立の景観を愛で、但馬(現在の兵庫県)の城崎温泉に寄り、山陰道を西に進んで九州に入り、五月七日に佐賀藩に帰着した。およそ二ヶ月に及ぶ旅において、百八首もの詩を詠み、詩巻の末尾には男児(文橋)の生誕を喜ぶ一首を附して、「北海観風草」と題した。そして当時、佐賀藩校弘道館で教授の任

にあった同僚の古賀精里に序文を依頼した。今回は、信州追分宿にて詠んだと見られる「浅間山」(作品番号580)を取り上げる。

鶴山は天明三年(一七八三)に起きた浅間山噴火に遭遇した人から、当時の災害のことを聞き、十六句の五言古詩とその序を著した。まず序を見よう。

天明甲辰の歳、此の山、砂を飛ばし火を雨らし、川谷皆な沸き、赤き地、数百里に亘る。在中将の

歌は『勢語』に載し、源右将の獵は『曾語』に載す。(原漢文)

内容は次のようである。天明三年、浅間山は砂礫を飛ばし、火山弾を雨のように降らせた。溶岩が流れ、川や谷の水は沸騰して、周囲数百里の土地が焼け野原となった。在原業平の和歌(信濃なる浅間の嶽に立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ)は『伊勢物語』に載せられており、源頼朝が富士野で巻き狩りを行ったことは『曾我物語』に記されている。一連の記述は詩の内容の説明である。在原業平と源頼朝のことは、詩の最後段に詠まれるので、読者が見て分かるように附記したのであろう。以下、三段に分けて詩の本文を解説しよう。

崎嶇攀浅嶺	崎嶇たり	浅嶺に攀づるみち
往事聴傷顔	往事	聴きて顔を傷ましむ
火石飛俱雨	火石(火山弾)	飛びて雨に俱し
湯泥湧盪山	湯泥(溶岩)	湧きて山を盪う
灰沙正昼黒	灰沙に正昼	(白昼) 黒く
雷電闇霄殷	雷電(火山電)	に闇霄(暗い空)殷し

険しい道を経て浅間山に登った鶴山は、噴火した時のことを聞いて、自然と悲しみの表情を浮かべてしまう。当時、浅間山からは火山弾が飛び出て雨のように降り、溶岩が湧いて山の表面を洗うかのように流れ、噴煙とともに舞う灰や沙に覆われて、真昼でも真つ暗になり、噴火口付近に突如として稲妻が走るたびに、空は赤く輝いたという。

現代と異なり、写真や映像が無い時代であるが、浅間山噴火を描いた絵図が伝えられており、鶴山はこれらを見たことがあったかもしれない。噴火の様子を的確に四句にまとめている。ここまでは自然現象の描写であるが、続く六句では人間社会を見舞った災害の様子を詠む。

奔木焦皆死	奔木(草木)	焦げて皆な死れ
馬牛風不還	馬牛	風して還らざ
慨歎数郡戸	慨歎す	数郡の戸
漂没大河間	大河(吾妻川)	の間に漂没し
偶免葬魚腹	偶魚腹に葬らるる	を免るるも
忽然墮鬼関	忽然として鬼関(冥界)	に墮つるを

周囲の草木はすべて枯れ、馬や牛は逃げて戻ってこなかった。特に嘆き悲しむべきは、上野国吾妻郡（現在の群馬県吾妻郡）をはじめとする諸郡の家々が、吾妻川の氾濫によって水没し、多くの人が亡くなったことである。

「歎」の字が『鶴山遺稿』の底本では、細川本と徳永本のいずれも「難」の字になっているが、恐らく写し間違いであろう。古文書『浅間山焼荒之日并其外家并名前帳』によれば、当時、火碎流の直撃を受けた浅間山北麓の鎌原村（現在の群馬県吾妻郡嬬恋村）では、五七〇名ほどの村人のうち四七七名が犠牲となり、生存者はわずか四七名であったとされる。また、別の古文書『浅間山焼荒一件』によれば、前出の鎌原村や泥流が流れ下った沿岸では一四九〇名を超える犠牲者が出たという（【注】を参照）。

鶴山の詩を読むと、火碎流や洪水に遭遇した民衆の中には、重傷を負ったり、あるいは心労が重なったりしたため急死した人もいたことが想像される。詩の最後段は、次の四句で締めくくられる。

仙郎歌已断 仙郎 歌は已に断え
 覇主獵長閑 覇主 獵は長閑たり
 始信田成海 始めて信ず 田の海と成るを
 其如遺子歎 其如せん 遺子の歎きを

旅の途中で見た浅間山の噴煙の荘厳さを詠んだ在原業平の歌はもう耳にすることはなく、源頼朝が

行った巻き狩りも長く行われていない。平安時代の貴族や鎌倉時代の将軍が愛でた浅間山の風景はすっかり様変わりしてしまったのだ。「桑田変じて海と成る」唐・劉希夷「代悲白頭翁」とはよくいったものだ。肉親を亡くした遺児らの悲歎に、無念がつのる。

天明三年の噴火から四年後、『伊勢物語』や『我物語』ゆかりの浅間山にて、鶴山は文芸の世界と大きく隔たった惨状を見聞きした。そしてわずかに生き残った人々の悲しみに寄り添うことしかできないのであった。

ところで、鶴山が「浅間山」を創作した理由、さらに言えば帰国の道をまげて「北海観風草」の旅に出かけたのは何故であっただろうか。

理由はいくつか考えられるが、少なくともその一つは、主君である鍋島治茂に読ませるためであっただろう。鶴山の旅程を調べると、各地の藩校、神社仏閣、名所旧跡のほか、但馬国の生野銀山（現在の兵庫県朝来市）と石見国の石見銀山（現在の島根県大田市）を訪れている。これらは佐渡金山と並ぶ幕府の直轄領であり、当時は現在のように観光地化されていなかったはずである。鶴山が山奥にあるこれらの鉱山を訪れたのは、藩主に報告するための視察でもあったと考えられる。つまり「北海観風草」は紀行詩巻でありながら、一種の出張報告書としての役割も兼ねていた可能性があるのだ。そのような視点に立てば、鶴山の「浅間山」詩が

まるでドキュメンタリーのような写実性をもつことも首肯できよう。

【注】

浅間山噴火に関する事項については、主に中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会編『1783 天明浅間山噴火報告書』第二章、四三〜四六頁を参照した。同書は「内閣府 防災情報のページ」の左記URLにて全文が閲覧できる。

http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyokunnokeshou/rep/1783_tenmei_asamayama_funka/index.html



石井鶴山先生遺稿

中尾健一郎・中尾友香梨 編

令和3年5月20日
 公益財団法人孔子の里 発行

草場佩川の『山野一善』序

佐賀大学 教授 中尾友香梨
 熊本大学 教授 中尾健一郎

佐賀県立図書館に草場佩川(一七八七—一八六七)の『山野一善』と題する写本一冊が蔵されている。

「佐賀弘道館記念会用紙」に写された複製本であり、原本ではない。全部で二十丁しかない薄い冊子であるが、佩川の自序を冠し、その後凡例に該当する「附言七則」、そして本文が続く。内容は多久の先賢たちの逸話集である。『佐賀先哲叢話』や『旧多久邑人物小誌』などには記されていない事柄も多く、大変面白い。ただ全編漢文で記されており、句読や訓点も附されていないので、やや読みにくい。

本稿ではまず序文のみを紹介し、佩川が『山野一善』を執筆した動機やきっかけを確認しよう。佩川の序文は次のような記述から始まる。

舜之所異深山野人者幾希、及其間一善言、見一行、如決江河。余読之惕焉、有所自警省。

舜の深山の野人と異なる所は、幾ど希なるも、其の一善言を聞き、一善行を見るに及びては、江河を決するが如し。余、之れを読みて焉れを惕れ、自ら警め省みる所有り。

冒頭の言葉は『孟子』尽心上の次の文を踏まえる。

「孟子曰く、舜の深山の中に居るや、木石と居り、鹿豕と遊ぶ。其の、深山の野人に異なる所以の者は、幾ど希なり。其の一善言を聞き、一善行を見るに及びては、江河を決して沛然たるが若く、之れを能く

禦むる莫きなり。」舜がまだ山奥にいた頃は、木や石の間に住み、鹿や猪と遊ぶありさまで、山奥に住む他の野人と異なるところがほとんどなかった。しかし他人の立派な話を聞き、他人の立派な行いを見ると、彼は川水が堰を切るような勢いで、素早くそれを実行に移した。誰にも止めることはできなかった。だからこそ彼は後に聖人になることができたのだ、と孟子は説く。つまり聖人と凡人との違いは、他人の善言を聞いて、または善行を見て、すぐにそれを実践できるかどうかである。佩川はかつて『孟子』のこの言葉を読んで、我が身を振り返り自らを戒めた。

頃帰病、懷無聊。見兒輩讀書、徒涉獵、殊域異代、汎然似無所試。問目前近事、果空疎也。於是乎、録平昔居郷所聞見、題曰山野一善。

頃、帰して病み、無聊を懐く。兒輩の書を読むを見るに、徒らに涉獵し、域を殊にし代を異にすれば、汎然として試みる所無きに似たり。目前の近事を問えば、果たして空疎なり。是に於いてか、平昔郷に居りて聞見する所を録し、題して『山野一善』と曰う。

近頃、郷里に帰省していたところ病を得て、無聊をかこっていたので、息子の読書の様子を見ると、ただむやみにさまざまな書物を読みあさっているも

の、書物(儒学の経典)に書かれている人物や事柄が昔の中国のものであるゆえに、ただ漫然として読んでいただけで、その内容を自ら実践しようとする姿勢は見えなかった。「殊域異代」とは地域も時代も異なる意。県立図書館の複製本では、「域」の字が「城」になっているが、写し間違いであろう。そこで身近なことに、つまり多久の先人たちのことを、息子に尋ねてみると、案の定、何も知らなかった。これをふまえて、佩川はかつて郷里にいたときに見聞きしたことを記録して、『山野一善』と題した。

因語之曰、甲某祖、乙某父、我山我野誰之所少老、彼則庭有訓、此則幼而能謀、或其祖先之儉勤、覆墜可惜、家門之積徳、餘慶到今。

因りて之れに語りて曰く、甲某の祖、乙某の父、我が山、我が野の誰の所の少老、彼れ則ち庭に訓え有れば、此れ則ち幼くして能く謀る。或いは其の祖先の儉勤、覆墜するは惜しむべし。家門の積徳、餘慶今に到る、と。

本の中では次のように語った。誰々の祖父、誰々の父、わたしたちの多久の何々山、何々野の誰々のところは、年長者が子孫に学問を教え、子孫は幼い頃からよく慎んで学んだものだ。また誰々の先祖は儉約して仕事に励んだが、惜しいことに子孫が家産を食いつぶしてしまった。また誰々のところは、先祖が代々徳を積んだおかげで、今でも子孫がその恩恵を受けている、と。

「庭有訓」は、孔子が庭を小走りを通り過ぎる長男伯魚を呼びとめて詩と礼を学ぶべきことを教えたという『論語』季氏篇の故事を踏まえた言葉で、家

庭教育を意味する。「謀」は慎む意。「覆墜」はくつがえり落ちること、ここでは家が没落することをいう。「餘慶」は祖先の善行の報として子孫の身に來る吉事。

このように佩川は息子も知っている多久の具体的な人々の名前をあげて、その祖父または父の事跡であることを明示しながら、先人たちの逸話を綴ったのである。そうすることによって、息子がそれまでのように、書物に記されている内容を自分とは直接関係のない遠い昔の他国の話として漫然と受け止めるのではなく、より親近感をもって真剣に学び、そこに記された先人たちの善言・善行を自らも実践しようとする姿勢を身につけてほしいと願ったのである。そして序文は次のように締めくくられる。

汝果能所斯、則有餘師焉。況其能進而所於國、所於天下、以及古人、亦可庶幾。苟局一鄉進、則人將嘲汝曰、唯読文書而已。此非余所期望也。勉旃。

天保丙申夏六月 珮川漁 識

汝、果たして能く斯に所れば、則ち餘師有り。況んや其れ能く進みて國に所り、天下に所り、以て古人に及ぶも、亦た庶幾かるべきをや。苟しくも一郷進に局すれば、則ち人は將に汝を嘲りて曰わんとす、「唯だ文書を読むのみ」と。此れ余の期望する所に非ざるなり。勉旃。

天保丙申夏六月 珮川漁 識

もしおまえがこの境地に身を置くことができれば、つまり他人の善言を聞き、善行を見て、それを実践的に学ぶことができるようになれば、おまえには大勢の先生(手本となる人物)がいることになる。

しかもそれは多久邑だけでなく、国(肥前国)ないし天下に進み出て広く学ぶことになり、古人にさえ近づくことができるのである。もしも多久邑の邑挙に合格するだけで満足すれば、人々はおまえを嘲つて、「文書が読めるだけで実践力のない人間だ」とそしめるであろう。それは私が望むところではない。よく勉め、励みなさい。

序文は天保七年(一八三六)六月に記されている。「郷進」とは、もともと科挙の郷試に合格した者を指すが、ここでは多久邑の邑挙に合格することを意味している。佩川が「汝」と呼びかけているのは、当時十八歳の長男廉(のち船山、一八一九〜一八八七)のことである。次男の龔生(一八二八〜一八四九)は当時わずか九歳であったので、ここでは明らかに船山を対象としている。ちなみに船山は翌年に十九歳で東原庵舎の教官に抜擢された(『旧多久邑人物小誌』)。あるいは船山はちょうどこの時期、邑挙に応じるための受験勉強に励んでいたのかもしれない。

父佩川は二年前から藩校弘道館の教諭になっていたが、序文に「帰病」とあるので、多久に帰省していたところ病にかかったのであろう。『草場珮川日記』(注)を参照)で確認すると、この年の五月十四日条に「小恙服薬」とある。では、『山野一善』の成立に関する記録も同日記から拾ってみよう。

十三日 校完山野一善
八月廿日 彦助来、訂詩、示山野一善

六月一日に序文を書き、十九日に校訂したとあるので、素稿はもつと早い段階ででき上がっていたはずである。そして最終的に完成したのは七月十三日であり、八月には人にも見せている。おそらくこの後も大勢の門人・知人が佩川の『山野一善』を読むことになったであろう。つまり『山野一善』は佩川が病氣療養中に息子船山の勉学状況を確認したことをきっかけに執筆したものであるが、けっして船山一人のために書かれたものではなく、学問をするすべての人のために書かれたものであるといわねばならない。

ここで改めて書名に込められた佩川の思いを確認しておこう。「山野一善」という言葉は、もちろん直接的には「孟子」の舜の逸話に由来するが、佩川が序文で多久のことを「我山我野」と記しているように、題名の「山野」は多久を意味するものでもあり、「一善」とは多久の先人たちの善言・善行を指す。多久の先人たちの事跡が、学問をするすべての人にとって、実践の手本になることを願ったのである。以上、本稿ではとりあえず『山野一善』の序文のみを紹介したが、今後機会があれば、佩川が『山野一善』に収録する先人を選んだ基準と先人たちのそれぞれの逸話についても少しずつ紹介していこう。

【注】

三好不二雄監修、三好嘉子校注・解題『草場珮川日記』下巻、西日本文化協会、一九八〇年。

- 六月朔日 稿山野一善自序
- 十九日 訂山野一善
- 廿日 補山野一善
- 廿二日 山野一善成
- 七月十二日 校山野一善

『珮川詩鈔』版本と版本が物語るもの 第4回
公益財団法人 孔子の里 評議員

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

前回は館所蔵の版本によりK本とM本が印刷されたことを証明しました。今回は各地に所蔵されている『珮川詩鈔』を、相互に比較し紹介します。

ここでは、所蔵機関のデジタルデータを筆者が参照し調査した成果を報告します。紹介する4箇所の大学・研究資料館所蔵の『珮川詩鈔』は梓線欠、罫線欠、文字欠、補修痕、入木、埋木などの分析(巻一33箇所、巻二40箇所、巻三27箇所、巻四47箇所※前回その一部を紹介)により、いずれも本館所蔵の版本で印刷されたことを証明できますが、紙面の都合上、今回は資料を掲載できません。

北海道大学附属図書館所蔵の『珮川詩鈔』

○表紙見返しと裏表紙見返し

巻一から巻四まですべてそろっています。表紙裏見返しには嘉永癸丑新刊「書林文榮堂墨香居」、裏表紙見返しには嘉永七甲寅歳發兌浪華書肆河内屋喜兵衛、藤屋善七、河内屋茂兵衛、秋田屋太右衛門、藤屋禹三郎、江都書房山城屋佐兵衛、須原屋茂兵衛とあります。また、跋文「嘉永辛亥四月 広瀬謙拜題 呉策書」と裏表紙見返し書肆・書房の間に諸冊子の広告が四頁と三行分あります。

裏表紙見返しに嘉永七年の記載があり、裏表紙見返しの書肆・書房名は、「嘉永六年癸丑歳新刊板元」と比較すると、藤屋禹三郎、山城屋佐兵衛、須原屋茂兵衛を除く四人が入れ替わっています。

○巻一 本文記載文字の主な異同

十裏上欄「愚意：作臆」九字を入木で印刷
十九表上欄「適當：以字」二十三字を入木で印刷

二十表上欄「空有：著夢」八字を入木で印刷
二十六裏七行「客」を埋木で印刷※「在」を差替
二十九裏上欄「書絶：書屋」十字を入木で印刷

○巻二 本文記載文字の主な異同

二十一裏上欄「□會：二句」十五字を入木で印刷
二十三裏上欄「躋當作隣」四字を入木で印刷

○巻三 本文記載文字の主な異同

九表上欄「宝満：神社」十字を入木で印刷
二十四表上欄「三四誤□圈」五字を入木で印刷
二十七裏五行「復」を埋木で印刷※「又」を差替

○巻四 本文記載文字の主な異同

一表六行「續」を埋木で印刷※「繼」を差替
二表二行「夙夜」を埋木で印刷※「宵旰」を差替
二表四行「膏恒經暑短」五字を埋木で印刷
※「經恒兼夜覽」五字を差替

二裏上欄「鶴作：況復」八字を入木で印刷
二十表六行「来眞：作説」半角八字を埋木で印刷
二十一表五行「復此趁鴻行」五字を埋木で印刷

※「歸馬獨彷徨」五字を差替

二十一裏上欄「老少：姑改」二十字を入木で印刷
二十二表上欄「無老：之義」十三字を入木で印刷
二十二表上欄「適讀：一例」二十八字を入木で印刷
三十一表上欄「蒼字：作民」十字を入木で印刷
※嘉永六年に新刊として出版された時点で、すでに入木で説明を加え、埋木で文字を差替えたと考えられる箇所は除いています(続く蔵書も同様)。

新潟大学附属図書館(佐野文庫)所蔵の『珮川詩鈔』

○表紙見返しと裏表紙見返し

巻一から巻四まですべてそろっています。表紙裏見返しには嘉永癸丑新刊「書林文榮堂墨香居」、裏表紙見返しには発行書林(住所省略)須原屋茂兵衛、

須原屋伊八、山城屋佐兵衛、英大助、岡田屋嘉七、出雲寺文治郎、紙屋惣右衛門、榎並屋小兵衛、近江屋平助、伊丹屋善兵衛とあります。また、跋文「嘉永辛亥四月 広瀬謙拜題 呉策書」と裏表紙見返し発行書林の間に諸冊子の広告が二頁分あります。

裏表紙見返しの書林名は、「嘉永六年癸丑歳新刊板元」と比較すると、須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、紙屋惣右衛門、榎並屋小兵衛、伊丹屋善兵衛を除く四人が入れ替わっています。

○巻一 本文記載文字の主な異同無し

○巻二 本文記載文字の主な異同

二十三裏上欄「躋當作隣」四字を入木で印刷

○巻三 本文記載文字の主な異同無し

○巻四 本文記載文字の主な異同

二十一表五行「復此□鴻行」五字を埋木で印刷
※「歸馬獨彷徨」を差替

お茶の水女子大学図書館所蔵の『珮川詩鈔』

○表紙見返しと裏表紙見返し

巻一から巻四まですべてそろっています。表紙裏見返しには嘉永癸丑新刊「書林文榮堂墨香居」、裏表紙見返しには「嘉永六年癸丑歳新刊板元」須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、内野屋彌平次、紙屋宗右衛門、榎並屋小兵衛、伊丹屋善兵衛、藤屋禹三郎とあります。

○巻一 本文記載文字の主な異同

十裏上欄「愚意欲作泥歳又作臆」九字を筆で記入
二十表上欄「空有待改作何着落」八字を筆で記入
二十六裏上欄「在客字之誤」五字を筆で記入

○巻二 本文記載文字の主な異同

九表上欄「追懷改作回頭」六字を筆で記入
二十三裏上欄「躋當作隣」四字を筆で記入

○巻三 本文記載文字の主な異同

九表上欄「宝満宮古称甘南備神社」十字を筆で記入

○巻四 本文記載文字の主な異同

二十一表上欄「歸馬：此越鴻行」十一字を筆で記入
次の時期に再出版する際、入木による追加や埋木による修正を示唆している点で重要です。

国文学研究資料館所蔵の『珮川詩鈔』

○表紙裏見返しと裏表紙見返し

巻一から巻四まですべてそろっています。表紙裏見返しには嘉永癸丑新刊「書林文榮堂墨香居」、裏表紙見返しには「嘉永六年癸丑歳新刊板元」須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、内野屋彌平次、紙屋宗右衛門、榎並屋小兵衛、伊丹屋善兵衛、藤屋禹三郎とあります。

○巻一〜四 本文記載文字の主な異同無し

特記すべきものではありませんが、本文の粹線、罝線、文字等の状況はK本と極めて類似しています。

次に、上記各地の『珮川詩鈔』について、それぞれ北大本、新潟大本、お茶大本、国文研本と略し、前回までに分析したK本、M本とともに総括します。

出版時期に係る前後関係

1 北大本関連

裏表紙見返しに「嘉永七甲寅歳發兌」の文字があり、お茶大本・国文研本・K本に記された「嘉永六年癸丑歳新刊」の翌年に発行されたと考えられます。国文研本・K本と比較すると、M本には本文上欄に新規入木で追加した文が13箇所、本文中に新規埋木で差替えた語句が9箇所あります。北大本では前者は13箇所、後者は7箇所です。北大本とM本の異同2箇所は巻一24表〜24裏の計17行で、北大本の「觀

蔚山城守圖」(M本「余在長崎：」の九行)と北大本の「初夏田園」(M本「觀蠻船開帆」二首)の八行)で、他はほぼ同じです。嘉永七(改元され安政元)年から明治10〜12年頃の間、版木に入木や埋木で追加・修正した箇所は、現時点では、これ以外に見できていません。また、「嘉永六年癸丑歳新刊板元」と比較すると、板元の八人中四人が入替わり、M本発行者の大谷仁兵衛とも異なり、新たに印刷されたと認められ、北大本はM本に先行して発行されたと考えられます。

2 新潟大本関連

国文研本・K本から北大本・M本への移行期に相当するのが、新潟大本です。北大本・M本にある追加・修正のうち2箇所が出てきています。興味深いのは、巻四21表五行に埋木で印刷された「復此□鴻行」のうち「此□鴻」の印字が薄く、上から墨で書き重ねた部分です。M本・北大本で「趁」と見える活字を、走ソウニヨウの右を糸に書き換えており、お茶大本が当該箇所を指摘した文字に一致します。新潟大本の追加・修正は北大本・M本に引き継がれています。また、「嘉永六年癸丑歳新刊板元」と比較すると、板元が十人中四人が入替わり、新たに印刷されたと認められ、新潟大本は北大本に先行して発行されたと考えられます。

3 お茶大本関連

本文上欄に、6箇所の追加説明と1箇所の文字誤りを指摘した文が筆で記入されています。このうち2箇所が新潟大本において入木・埋木による追加・修正が行われ、更に、字の誤りを指摘した1箇所を含む4箇所が、北大本・M本において入木・埋木による追加・修正が行われています。また、奥付に記された「嘉永六年癸丑歳新刊板元」八名と、北大本の書肆・書房七名や新潟大本の書林名十名とは部分

的に異なり、新たに印刷されたと認められ、お茶大本は新潟大本、北大本、M本に先行して発行されたと考えられます。

4 国文研本関連

北大本・新潟大本に見られる新たな入木・埋木やお茶大本に見られる筆による記入は無く、表紙裏見返し・裏表紙見返しや本文の状況はK本と酷似し、K本とほぼ同時期に印刷されたと考えられます。

5 お茶大本・国文研本・K本関連

これら三本は、上記140箇所以上の分析により、ほぼ同時期に印刷されたと考えられます。ただ、お茶大本には本文上欄への書き込みがありますが、お茶大本に無い罝線切・レ点切が国文研本にあり、また、お茶大本・国文研本に無い罝線切・レ点切がK本にあることから、お茶大本↓国文研本↓K本の順に印刷されたと考えられます。

今回調査した諸本の前後関係

上記1〜5のことから、六種類の『珮川詩鈔』は、お茶大本↓国文研本↓K本↓新潟大本↓北大本↓M本の順に印刷されたと考えられます。ただ、板元名が同じお茶大本・国文研本・K本は、ほぼ同時期(嘉永六年頃)の印刷と考えられます。これら三本と書肆・書房記載の新潟大本、書林記載の北大本(嘉永七年頃)、津逮堂記載のM本(明治10〜12年頃)の三本は、時期差や年代差があると認められ、現時点では、当館所蔵の版木を更新しながら四期に渡り刊行されたと考えられます。ただ、内容的には新潟大本と北大本の間、年代的には北大本とM本の間、若干の隔たりがあり、この間を埋める新たな『珮川詩鈔』が存在する可能性も残っています。(稿了)

多久家文書

『水江事略』(翻刻文)紹介 8

服部政昭

水江事略卷之四 長信公譜之三

長信公譜三 天正二年甲戌ヨリ 天正四年丙子ニ至ル

同二年甲戌 長信公御年三十七

正月隆公松浦ヲ御征伐ノ為先草野ノ城ヲ攻ラレントテ元日ヨリ平原表ニ御発向有我公御先鋒ノ思召ニテ同日甲冑ヲ帶セラレ御發馬ノ御用意アリシ所ニ隆公ヨリ御使ヲ以テ仰越サル、ハ此度草野一家ヲ討亡サン事掌ノ内ニ在リ併此時ニ至テ後藤平井其外南方ノ敵徒等草野カ後詰センニ於テハ頗ル難義タルヘシ是ニ依テ御邊ハ弥堅固ニ多久城ヲ守リ逆徒ヲ押ヘ玉ヘカシト仰越サル爰ニ於テ公ハ御出陣ヲ止メラレ下総守信種ヲ御陣代トシテ物頭數人ヲ相附ラレ草野表ヘ遣ハサル信種兵ヲ率ヒ公ニ代テ搦手ノ先陣タリ附從フ輩ニハ堤兵部丞原右衛門允武岡刑部左衛門等ヲ始トシテ數百ノ軍勢各勇武ヲ振ヒ搦手ヲ攻破ル(草野ノ臣中嶋右衛門允防戰甚烈シ我公其武勇ヲ聞召レ後招ヒテ家臣トセラル)城主鎮永力盡テ下城シ筑前ニ奔ル隆公御陣ヲ移サレ貴志岳ニ押寄セ半年行ニ到ル城主波多參河守鎮下城松浦悉ク隆公ノ御手ニ屬ス實ニ正月上旬ナリ我公福地藏人ヲ御使ニテ松浦表ノ平均ヲ賀セラル

家傳ニ云我公下総守以下ノ群臣等ニ告テ曰今度我兵松浦表ノ軍ニ戰功ヲ現ハセシニ依テ龍造寺ノ大利ト成シハ是偏ニ下総守等力勲功ナリ以來元日歳夜ノ儀式草野出陣ヲ以テ吉例トスヘシト仰出サル今ニ至ル迄歳ノ夜齋ノ包丁元日ノ鎧着皆其時ヨルノ佳例ナリ一説ニ草野陣ハ天正元年癸酉トモ龍造寺下総守信種長信ノ名代トシテ多久ノ兵ヲ率テ二陣ニ列ス 此時隆信公狂歌ヲ詠セラル

正月乃一日二日の事を遠ハ草野と號てカ、みもらかな

二月隆公後藤貴明ヲ御征伐ノ為ニ軍ヲ率ヒテ多久ニ來ラル我公御先陣ニテ先女山一揆ヲ平ラケラル爰ニ於テ鶴崎源太左衛門一揆數百人ヲ驅催シ山下ノ柵ニ楯籠ル我公軍ヲ率ヒテ太田二陣セラル先陣ハ龍造寺下総守船山父子按内者タリ進テ山下ノ柵ヲ攻破ル一揆等烈數防キ戰トイヘトモ是ヲ屑トセス散々ニ討散シ切捨數ヲシラス鶴崎ハ勇氣撓マス苦戰ストイヘトモ從卒悉ク討死シ自身モ數ヶ所ノ疵ヲ被リ武雄山ニ逃走ル(或説ニ信種ノ家人鶴崎ヲ馬上峠ニテ討取其屍ヲ山下ニ葬ル是正明墓ト稱スト実否未詳ナラス)當家ノ勇士小侍空ノ允敵兵萩ノ原謀ヲ討テ其首ヲ得タリ土橋式部ハ向鶴某ヲ斃シテ首ヲ取ル梶原與助等思ヒ(二敵ヲ討取テ我公ノ賞ニ預ル(女山木ヨリ上ミノ名頭七十五人内二十八人ハ公ニ屬シテ子孫令ニアリ)隆公多久ヲ發シテ白刃田峠ニ陣セラル我公御同陣ナリ後藤勢ノ先手原直景ヲ大将トシ猪ノ隈ヨリ發シ櫻木□來テ接戰ス味方奮戰シテ後藤勢ヲ散々ニ打破ル直景敗績シテ武雄ニ走ル時ニ須古ノ平井經治長臣津河某ヲシテ後藤ヲ救ハシム河津數百ノ兵ヲ率ヒ來テ久津具嶋ニ陣スニ公其勢ヲ合セ久津具嶋ヲ責ラル敵ハ防戦力ヲ尽ストイヘトモ我兵龍虎ノ如ク猛リ懸テ戰フニゾ須古勢散々ニ敗シ久津具嶋ニ追詰ラレ溺死スルモノ數ヲ知ラス味方江ヲ打渡リ河津ヲ追フ河津ハ伊王寺海羅岐ニ追詰ラレ終ニ其場ニ自害スニ公殘兵ヲ追討テ首二百餘ヲ得タリ須古ノ城外マテ押詰軍ヲ返シ小通ノ橋ヲ渡テ志久村ニ宿陣セラル翌日午ノ刻斗リニ貴明大勢ヲ率ヒテ北方□石ニ來陣スニ公整々ト御備ヘラ立ラレ後藤勢ト御對陣有後藤勢敢テ戰ヲ交ヘスシテ遙ニ備ヘタリ時ニ志久ノ住人岩永八郎左衛門尉(此以前我公ノ臣トナル)物見ニ出テ貴明ノ勇士朝重團助トハシタナク行合槍合セ戰ヒシカ難ナク團助ヲ突伏セ首ヲ取ル隆公ハ岩永カ勲キヲ御賞美有テ御鎗ヲ下サレシト云々

傳ニ云櫻木ノ住人ニ杠越後ト云フモノ有二公ノ命ヲ受テ猪ノ隈ノ城ニ放火シ久津具嶋須古ノ戰ヒニモ度々武勇ヲ顯ハセシニ依テ我公殊ニ御賞美有テ御家

臣ニ成サレ多久ノ北境ニ置カル 一月後藤貴明ト御和平アリ同二十五日我公及龍造寺信種貴明ト神文ヲ御取替サル貴明長子弥次郎晴明(今年十二)ヲ人質トシテ佐嘉ニ遣ハス我公家臣福地藏人ヲ警固ニ相附ラレ晴明ヲ鹿子村瑞雲菴ニ置カル 今年貴明養子惟明(實ハ松浦鎮信ノ弟)ト不和ノ事起リ家臣ノ輩惟明ニ組スルモノ多シ既ニ鉾楯ニ及フ貴明ハ住吉ノ城ニ居リ惟明ハ本城ニ據ル貴明援兵ヲ佐嘉ニ乞惟明モ亦使ヲ遣シテ加勢ヲ求ム隆公軍ヲ出シテ貴明ヲ救ハル父子白水原長谷ニ戰フ惟明敗亡ス貴明ハ隆公御加勢ノ恩ヲ感シ晴明ヲ質トシテ和平ヲ乞是ハ信種原直景(猪ノ隈ノ城主)ト相談ノ上和議ヲ取扱ヒシトナリ

御年譜 貴明其養子惟明ト不和ニシテ既ニ干戈ニ及是ヨリ先貴明子ナキヲ以テ平戸ノ松浦道可カ子ヲ迎テ家督トシ左衛門太夫惟明ト稱ス其後貴明實子晴明ヲ生ム長スルニ隨テ惟明不平ノ事甚多シ家臣渋谷江公諸松尾小楠原八並以下ノ七十五人徒黨シテ貴明ヲ討ント謀ル貴明驚キ武雄ノ城ヲ出宮野ニ入城ス惟明本城ニ據リ隆公杵嶋ノ御陣ニ使ヲ立援兵ヲ乞宮野ニハ永田久間辻藤山カ輩貴明ヲ守衛シ同ク加勢ヲ求ム隆公何レヲカ救ハルベキト御猶豫有シカハ信昌公ノ云惟明ハ子ナリ不孝ノ罰天誅ヲ蒙ルベシ貴明ハ父ナリ微勢ナリトモ救フニ理アリ御加勢ヲ貴明ニ遣ハサルベキカトアリケレバ隆公尤ナリトテ小河納富執行ヲ塚崎ニ差越サル七月三日惟明宮野ニ押寄セ鳥海三間坂ヲ放火シテ歸ル時ニ小河等ノ勢武雄ニ到リ急ニ惟明ヲ攻ム惟明利ヲ失ヒ既ニ討レントス時ニ松浦道可馳來リ隆公ニサマザマ嘆キ惟明ヲ助ケテ下城セシム則小田ノ井元上総介ニ預ケ其後平戸ニ渡サル(惟明ノ子孫平戸ニ殘ルト云)翌三年貴明此恩義ヲ忘却シ龍造寺ニ對シ再ヒ違心アリ一族山城守貞明佐嘉ニ通シ加勢ヲ招ク仍テ三月中旬隆公御出馬有テ塚崎ニ取懸ラル去トモ城中堅固ニシテ事共セス公其体御覽有テツクゾク御思慮アリ田原伊勢守ヲ御使ニテ重テ御和平アリ御三男善次郎君ヲ貴明ノ養子トセラレ貴明ノ実子弥次郎ヲ公ノ御養子ト成サレ龍造寺左衛門家

均ト改メ太僕ノ庄ヲ知行シテ中比久保田へ在館セシカ後ニ狂奇ニ成テ廢セラレタリ

十二月隆公平井經治ヲ御征伐有我公兵ヲ率テ發向セラレ須古城ノ要害一間堀ヲ攻ラル城兵防戰烈數味方死創甚夥シ同二十日勳ミ戰テ終ニ城ヲ陥ル我臣石井大隅守

同原左衛門相神浦右衛門允同左衛門當手ノ先登シテ城ニ打入名アル敵數人ヲ討取南里隼人同三郎左衛門富成

七郎兵衛田淵孫左衛門等烈敷攻討テ各首ヲ得タリ中ニ毛成富與六左衛門平井カ老臣草場治部太輔ト渡リ合突

伏セテ首ヲ取ル石井大隅久松左衛門等縱橫無盡ニ働キ終ニ討死ス城兵既ニ敗レ經治ハ百丁牟田ヲ越テ遁レ出

ル所多久ノ兵士行先ヲ遮ル經治逃ル、道ナク終ニ自殺ス其臣今村奎允多久上野介兼具遠江守以下一間堀持口

ノ敵數輩當手ノ勇士皆是ヲ討捕
杵嶋郡喜佐の木ノ村長喜佐の木三郎兵衛ト云者平井ノ麾下ナリシカ此比我公ニ志ヲ通シ今度多久勢ヲ導

キ一間堀ニ於テ戰死ス一子アリ(後ハ右衛門ト云フ)乳母ノ才覚ヲ以テ喜佐の木ヲ去リ北方村ニ隱レ

居ル龍造寺信種是ヲ聞テ云是ハ當家ニ於テ忠アル者ノ子ナリ捨置ヘキニ非スト女山ニ呼取家臣トスト云

同三年乙亥 長信公御年三十八
武雄ト和平破レ隆信公晴明ヲ貴明ニ差返サル龍造寺刑部太輔盛家ヲ附テ武雄ニ送ラサル又我公ノ臣福地藏人

ヲモ相添ラル是ハ最前和平有シカハ我公ノ御調義ニ依リシ故ナリ矣二月二十八日ナリ其後我公貴明ト御義

絶有テ互ニ封境ヲ爭フ
二月十三日後藤勢志久村ニ寄來ル我公又兵ヲ出シテ御合戰アリ時ニ篠川忠尊貴明ノ士不動寺半助ト槍ヲ合セ

形ニ申候 恐々謹言
十三子刻
長信 返 かしく
隆信

同四年丙子 長信公御年三十九
正月隆公有馬御追討ノ為須古ノ城ヲ改メ築カル十一日

ニ經營ヲ始マリ御加勢ヲ我公ニ請ハル公御領内ノ人夫數百ヲ出サル奉行ハ西岡丹後入道慶賀福地藏人ナリ

人須古ニ在テ數日普請ヲ勤ム頓テ成就シテ隆公御入城アリ

同月十三日ノ曙獅子カ城主鶴田越前守前(永祿元龜ノ比ハ龍造寺ニ屬セシカ近年當家ニ叛キ大友ニ從フ)三

男久善坊豪海及ヒ一族數人ヲシテ餘多ノ軍兵ヲ率ヒ我境ヲ侵サシム境目ヲ守ルノ輩烈敷是ヲ防ク時ニ南里隼

人同三郎左衛門尉野田三助等多久ヲ發シテ中多久ニテ敵ニ出會大ニ防キ戰フ野田主從討死ス(家僕平左衛門

東嶋勤兵衛主ニ殉テ討死ス)南里父子モ深手ヲ負フ味方大ニ敗ル時ニ相浦右衛門允父子一族鶴田カ打テ出ル

ヲ聞テ住所相浦ヲ出テ半途ヨリ使ヲ龍造寺康房(初信種)ニ遣ハシテ多久勢鶴田ト接戰ノ半塩合ヲ見テ我

一烈横合ヨリ突懸リ敵ヲ敗ルヘシト慄シ合セ馳テ笹原(松浦ト多久トノ境相浦ノ西ニ當ル其間四十余丁ナリ)

ニ到レハ味方既ニ敗レテ豪海ハ境ヲ越テ歸ル相浦ハ一足後レテ間ニ合サルヲ大ニ憤リ從者ヲシテ鉄砲ヲ放懸

シム豪海士卒半ヲ分ケ取テ返シ相浦ヲ困テ短兵急ニ是ヲ擊ツ相浦モ奮ヒ戰フトイエトモ豪海驍勇中々當リ難ク殊ニ只今相浦ヨリ遠路逸散ニ馳來リシ故身力勞果終ニ敵ノ為ニ打破ラレ右衛門允同左衛門尉同四郎左衛門尉(右衛門允カ弟)寶藏寺ノ住人宮内卿(山伏)野

ル小侍土橋俄ニ起テ逃カサシト打テ懸ル敵兵敗レテ散亂ス二士ハ得タリト勝ニ乘テ切立ル鶴田カ家士下平宗清ト云勇兵烈敷防キ戰フ所ニ小侍ハ能キ敵ナリト槍ヲ合セ是ヲ突倒ス土橋河内九弥右衛門ト渡リ合首ヲ取ル殘兵散々ニ敗走ス

二月隆公軍ヲ率藤津郡横澤(一本横造ニ作ル)ノ城ヲ攻ラル我公モ衆軍ヲ引テ御出馬有龍造寺康房隊長タリ

城主深町尾張守加番原左近持口ヲ差因メ稠敷防キ戰フ同六日先手ノ大将鍋嶋飛彈守信昌公龍造寺下総守康房

小河武藏守信貫及鴨打陸奥守德嶋筑後守千布因幡守等其勢都テ六千餘各先ヲ爭ヒ攻寄セタリ犬塚彈正忠父子

一族先登ニ進ミ一方ヲ破ル其他佐嘉ノ軍士奮ヒ戰テ討取敵數ヲ知ラス城主深町原以下討死シ城終ニ陥ル爰ニ

於テ藤津ノ諸城悉ク降服ス隆公ハ暫ク藤津ニ御滞留有テ郡中ノ仕置ヲ定メラル
三月隆公藤津ヨリ御軍ヲ回サレ武雄ニ御發向アリ我公

兵ヲ率テ後藤貴明是ニ會セラル諸方ノ砦ヲ燒拂ヒ本城ニ桶籠ル我公軍ヲ進メテ磐井ニ屯セラル貴明堅ク城ヲ

守テ打テ出ス隆公ノ先鋒城下ニ押詰合戰度々ニシテ終ニ村々ヲ放火シテ歸ル
八月佐嘉ト武雄ト又和平ヲ結フ是龍造寺康房貴明ノ属

將河原豐前守(河古郷ニ居住ス康房ノ采色女山ニ隣ル)ト調義ニ依ル所ナリ貴明又彌二郎晴明ヲ質トス隆公福

地藏人ヲシテ迎ヘシム晴明多久ニ來テ桐野山ニ居ル時ニ八月二十五日ナリ爰ニ於テ隆公我公ノ御息女ヲ以テ晴明ニ妻ハシ采地ヲ與ン事ヲ約セラル
四年丙子隆公須古ノ城御普請成就シケレハ頓テ御移住

アリテ弥有馬ト武ヲ爭ハル有馬モ又威ヲ逞フシテ少モ屈セス自身大勢ヲ率テ藤津表へ押渡リ横造鷲ノ巢鳥附(或ハ鹿嶋トモ)松岡等ノ城々ヲ構ヘ深町尾張守(或ハ美作守トモ)原左近太夫岩永和泉守ニ有馬修理太夫

義直ヲ大將分トシテ差籠置合戰ヲ志ス彼敵城皆隆公ノ新館須古ト行程近クシテ油断ナキ事ニテ有ツル間是ヲ退クヘシト評定セララル 鎮西志 (以下 次号に続く)

《儒林》

服部政昭

原浄忠(守孝、花村)

(貞享三年(1686)～明和二年(1765))

諱は恭安、通称は弥一衛門、号は花村、法名説譽浄忠。私諡は守孝。花祭村(現、杵島郡江北町花祭)に住する。

幼くして花祭村(現、多久市南多久町田柄)の曹洞宗東岳山龍照寺の和尚に従いて書を読む。のちに別府村臨済宗慈雲山通玄院並びに小城三里村臨済宗医王山三岳寺に就いて学ぶ。

元禄十四年(1701)、十六歳の時に四代邑主多久茂文公に仕え、十八歳の時に侍講となり、茂文公が亡くなるまで十一年間にわたり教授する。その後、六代邑主茂明公、七代邑主茂堯公の侍講を二十五年間務める。

茂堯公は、花村が郷里から遠く離れた佐賀城邸で勤務するのを憐れんで、特に命じて郷校東原精舎(東原岸舎)の祭酒(教授)とした。茂堯公の嫡男龍二郎(聯山)に教授する事凡そ十年。幼き頃より老いに至るまで歴代の邑主に仕えるを賞し、三たびの秩禄を加賜し、騎士の班に列された。元禄十四年(1701)より宝暦元年(1751)に至るまで五十有一年。晩年には足を患ったものの、一日も職務を怠らなかつた。六十六歳をもつ

て官職を辞した。

宝暦四年(1754)五月十一日、六十九歳の時に、邑主茂堯公の嫡男龍二郎(微笑山聯山流芳居士)が温邪により十四歳で急死すると、将来を期待していた恭安も歎き悲しみ、自らも剃髪して浄忠と名乗る。



▲微笑軒聯山の墓(慶閨寺、佐賀市)

浄忠は病中でも温潤和悦、客が来れば応接して礼を怠ることはなかつた。病気がひどくなつてから、家人に「自分の命は、もう三日と持てまい」と云い、三日目の朝、顔色が変わつたので、令子、五太夫が薬を進めると、それを飲み干して「嗚呼、自分は大層ご両親の御世話に成つた」と云いながら眠るが如く逝かれた。明和二年(1765)七月二十八日、享年八十歳。葉山の墓地に葬られた。

原 浄忠 略年譜

1686年 (貞享三年) 原忠重の嫡男として生まれる。
1701年 (元禄十四年) 十六歳、多久茂文公に仕える。

1703年 (元禄十六年) 十八歳、茂文公の侍講となる。

1711年 (正徳元年) 二十六歳、茂文公没す。

1714年 (正徳四年) 二十九歳、中馬一郎兵衛の娘を娶る。

1716年 (享保元年) 十一月二日、三十一歳、嗣子、五太夫が生まれる。

1717年 (享保二年) 三十二歳、茂堯公の侍講となる。

1738年 (元文元年) 五十二歳、父忠重(浄源)、致仕。花村が家を嗣ぐ。秩禄若干を加賜される。

1742年 (寛保二年) 五十六歳、郷校東原精舎(東原岸舎)の祭酒(教授)となる。

1747年 (延享四年) 六十一歳、父忠重(浄源)没す。

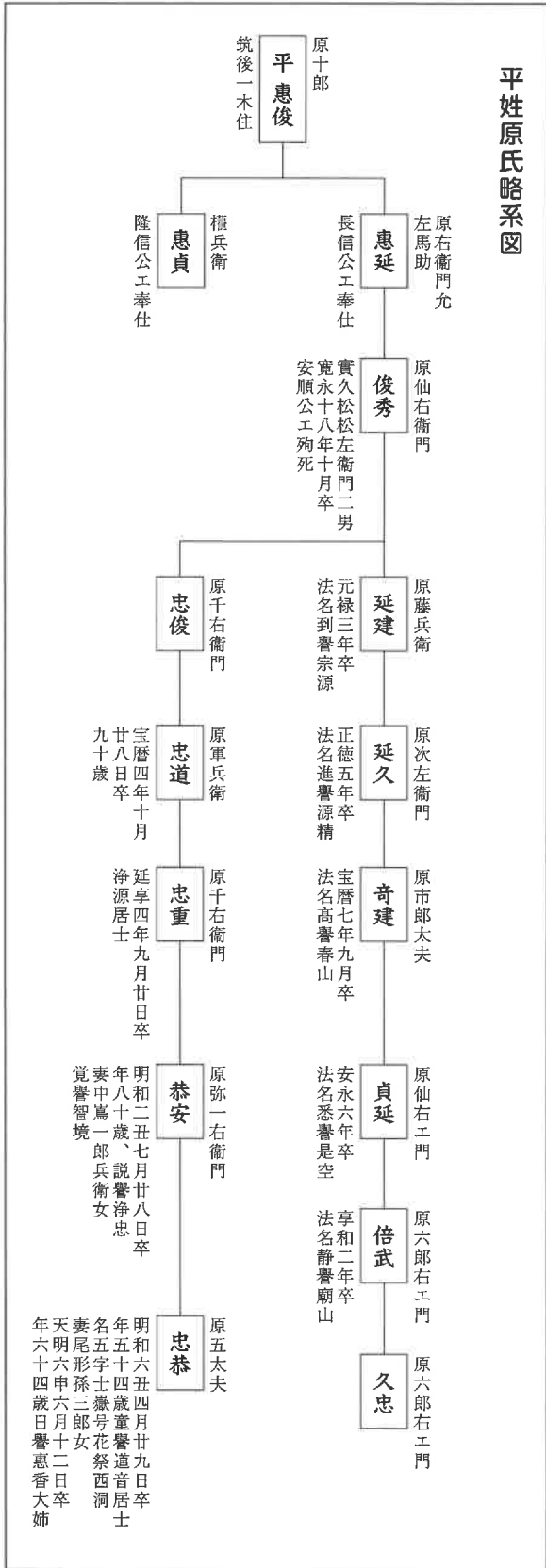
1748年 (寛延元年) 六十二歳、采地若干を加賜される。

1752年 (宝暦二年) 六十六歳、官職を辞す。

1755年 (宝暦五年) 六十九歳、公子聯山の喪に遭う。剃髪して入道浄忠と號す。

1765年 (明和二年) 七月二十八日。八十歳で没す。法名説譽浄忠。葉山に葬る。

平姓原氏略系図



浄忠は資性端良剛正、忠厚勤直で、広く和漢の伝記に通じており、そのうえ、文才もあり、能書で、詩歌も巧であった。壮年の頃は遊獵を好み、山野を横行闊歩して、銃を放し刃を振るつた。また、浄忠の父上（浄源）は酒を好まれたので、城下から帰省する時は、必ず美酒一壺を携えて父に進めたと伝えられ、人々から「守孝先生」と呼ばれた。

原氏の采地は、明治維新により、山口村の新宿、土元と共に花祭村のうちの花祭、白木が分村運動の結果、杵島郡江北町に加わり、教育機関も、東原庫舎の笹原分校から分かれて、花村の名を冠した花村小学校が設けられたが、明治十一年一月十日の火事により消滅、花祭分校として再建された。天文十四年（1546）、水江龍造寺家の二代家

兼は、小次氏の家臣馬場頼周により、二人の息子と四人の孫を川上および祇園原に於いて謀殺された。その時、家兼は幼い隆信、長信を連れて、筑後国の柳川城主蒲池鑑盛の保護を受けた。

さらに、天文二十年（1551）、隆信・長信兄弟は、龍造寺鑑兼を当主に擁立せんと謀った家臣土橋栄益らによって肥前を追われ、再び、筑後一木村に逃れて蒲池鑑盛の家臣原十郎惠俊の館に身を寄せた。

天文二十二年（1553）、蒲池氏の援助と肥前郷士の援助を受けて肥前の奪還を果たす。この時に原十郎と三人の息子が活躍をし、次男左馬之助を長信公へ、三男権兵衛を隆信公の家来に差し出している。

次男左馬助は、元亀元年（1570）、多久入城にお供し、代々多久家臣として浄忠の家系に引き継がれている。

三男権兵衛の子孫は、小城鍋島家の家臣となる。

【参考文献】
『舊多久邑人物小誌』(舊多久邑史談會、1931年初版/多久町懇話会、1979年再版)
『佐賀先哲叢話』中島吉郎著(1902年初版/伊東祐毅、1913年再版)
『北肥戦誌』(馬渡利繼原著、高野和人編集、青潮社、1995年発行)
『水江巨記』由緒(秀村選三編集、文献出版、1986年)
『水江事略』卷之二、卷之十三(多久市郷土資料館蔵)
『多久諸家系図』原氏系図(多久市郷土資料館蔵)

ふるさとの石碑 2 史蹟多久聖廟記念碑

服部政昭



(石碑南面) 史蹟多久聖廟



(石碑西面) 蹟名勝天然記念物保存法ニ依リ

大正十年三月内務大臣指定
佐賀縣知事正五位勲四等 齋藤行三謹書



(石碑北面) 大正十三年十月建設



《メモ》

● 史蹟石碑

今年（令和三年・2021）は、多久聖廟が史蹟に指定されて百年になる。

多久聖廟は創建以来、多久家の庇護と学田・学林の収入により、維持管理・春秋の釋菜の運営を行ってきた。しかし、明治維新の版籍奉還・地租改正により収入がなくなり、管理運営が不可能となり、東原庵舎で学んだ有志の手により、聖廟保存会が設立され、寄付金収入により維持管理がなされてきた。

しかし、明治二十六年（1893）十月十四日の台風により、仰高門が倒壊する等の大被害を受けた。

そこで明治三十六年高取伊好を会長として聖廟改築委員会を設け、寄付金を募集し、原型復旧を基本として明治四十年五月に着工し、四十二年四月に落成。この創立二〇〇年祭改築以来、多久郷五ヶ村では、聖廟管理委員会を設立し、維持管理を行うようになった。

このような東原庵舎で学んだ多久の先賢達の努力は、当時の大坂朝日新聞主筆で、コラム天声人語の名付け親である漢学者西村天因も訪れる等、多久聖廟の史蹟指定の大きな原動力となっている。

この石碑の書を書いた佐賀縣知事齋藤行三（1882〔没年不詳〕は内務省官僚として大正十三年（1924）七月二十三日に、官選の第二十一代佐賀縣知事に就任、昭和二年（1927）三月三十一日退官をしている。齋藤知事の妻恒の祖父は芳野金陵（儒学者、昌平校教授、父は芳野世経（衆議院議員）。姻族に儒者一族がいることから多久聖廟に対しては深い思いを持っていたと思われる。

● 道標石柱

（石柱北面） 史蹟多久聖廟 南四軒



（石柱東面） 史蹟名勝天然記念物保存法二依り 大正十年三月 内務大臣指定



（石柱南面） 昭和十年九月 佐賀縣

史蹟多久聖廟への道標石柱が多久市立病院前の交差点南西の土地一隅に建っている。

現在の石柱がある土地は、江戸時代には、多久家の御茶屋の跡である。多久家領主の御屋敷は佐賀城内北の丸にあり、御茶屋とは、領主が領地である多久に来られた時にご休憩またはご宿泊された屋敷である。現在、法務局に残る明治三十年の土地台帳によれば、当時の地主は多久乾一郎男爵。明治三十六年六月十八日に相続登記で多久龍三郎男爵へ。昭和二十二年八月二十五日に片桐光治へ所有権移転されている。一筆の土地が今では二十八筆に分筆されている。

この道標（みちしるべ）石柱は、建設時の昭和十年九月には、国道二〇三号線と県道二四号筋原武雄線の分岐点であった小林呉服店の土地北東角に建てられていたものが移転されたと推定される。

● 古絵葉書



肥前多久孔子之廟 TEMPLE OF CONFUCIUS, TAKU, HIZEN (杉町菊水堂發行)と記されている絵葉書がある。

杉町菊水堂は明治三十五年創業、佐賀市白山の老舗画材店。大正時代初めの頃、多久聖廟が史蹟に指定される前に発行されたものと推定される。写真に写っている五名の紳士の服装も興味深い。

来訪・来信・雑録

- 4月14日 春季釈菜絵練習
- 4月18日 令和3年度多久聖廟春季釈菜
- 5月11日 令和3年度第1回理事会
- 5月12日 令和3年度評議員選定委員会
- 5月20日 「石井鶴山先生遺稿」発刊
- 5月28日 令和3年度第1回評議員会
- 5月28日 令和3年度第2回理事会(書面評決)
- 6月3・4日 有田町同朋保育園来訪「東原岸舎内で論語の素読」
- 6月4日 深江ゆか氏(深江順房氏子孫)来訪
- 6月5日 鶴山塾「中国古典の扉①」
- (講師：武田耕一(公財)孔子の里理事)
- 6月19日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
- 「石井鶴山の紀行詩について」
- (講師：中尾健一郎 熊本大学教授)
- 6月23日 ゆい工房「本格蕎麦打ち」
- 6月26日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
- 「江戸中期の佐賀藩の漢学を支えた人物―西岡春益―」
- (講師：中尾友香梨 佐賀大学教授)
- 7月2日 吉田公平 東洋大学名誉教授(櫻鳴協議会顧問)来訪
- 7月3日 孔子の里財団設立30周年記念式典
- 7月17日 鶴山塾「中国古典の扉②」
- (講師：武田耕一(公財)孔子の里理事)
- 7月27日 多久「孔子の里」芸能保存会代表者会議
- 8月3日 東原岸舎防火・緊急対応訓練
- 8月7日 鶴山塾「中国古典の扉③」
- (講師：武田耕一(公財)孔子の里理事)
- 8月8日 ゆい工房「夏休み子ども企画」
- 9月2日 第5回多久百景写真コンテスト審査会
- 9月8日 令和3年度秋季釈菜委員会
- 9月25日 鶴山塾「中国古典の扉④」
- (講師：武田耕一(公財)孔子の里理事)

「孔子の里」30周年

福岡市 野口康子 64

コロナ禍で、多久聖廟の釈菜に行けず大変残念だった。しかし、献詩だけは続いている。それまでは夫と釈菜の日に、多久聖廟を拝廟させてもらっていた。

私が漢詩を奉納させていただくようになり、十数年たつ。聖廟のそばに建つ東原岸舎に寄り、関係者の方々とお話させていただくのが一番の楽しみだった。知り合いも増えた。

「孔子の里」が今年発足30周年とのこと。多久聖廟はもとより、周辺の遺跡を保全し、儒教文化の発展など、文字通り孔子さまを崇敬するための活動拠点である。心よりお祝い申し上げます。

孔子の里から趣向を凝らした記念品が贈られてきた。長年の献詩が理由だったが、大変感激した。孔子の言葉「仁」のような、思いやりの心を持つ方々だ。記念誌を拝読していたら、歴代の理事や評議員、職員の名簿が載っていた。「ああ、あの時の釈菜でお会いした方だ」と懐かしく思う名前が多く見られ、当時は思い返した。

拝廟するたびにいろいろな出会いが生まれ、地元の方々と楽しくお話をさせていただきうれしかぎり。これも孔子の里を大切に継承発展させてきた方々のおかげだ。300年以上の長い伝統を守り、地元可愛され続ける多久の宝、聖廟を今後も後世に伝えてもらうべく、末永い活動を切に願う。

(佐賀新聞 令和3年9月2日掲載)

編集後記

孔子の里は、財団設立30年を迎えました。これまで、多くの皆様のご支援をいただき、文教の里づくりに向けた様々な取り組みを進めてきました。

東原岸舎建設から三十二年、多久聖廟創建から三十三年。これからも、先人達の想いや郷土多久に息づく歴史・文化を今にいかし、未来へつなげていくことを一歩一歩進めていければと願っています。

今号から本誌の編集を担当させていただきます。皆様のご指導、ご協力をよろしくお願いたします。ご意見やご感想もお待ちしております。



ヤマガラ ~多久聖廟にて~ (福田司氏提供)

賛助会員入会の案内

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- ・会員の種類

個人賛助会員	年会費	一口	3,000円
法人賛助会員	年会費	一口	10,000円

・入会申込み・お問い合わせ
〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原岸舎内
公益財団法人孔子の里 事務局
電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
詳細は当財団ホームページをご覧ください。

🔍 孔子の里 🔍 検索